



芭蕉と近江

松尾芭蕉が、膳所（ぜぜ）の地に埋葬されていることを知る人は多くないだろう。1694年、51歳のときだった。木曾義仲を祀る義仲寺（ぎちゅうじ）に埋葬されている。芭蕉の遺言によるものだが、それほどに彼は近江を愛した。当時、義仲寺があった栗津が原は、びわ湖に面し景勝の地であったといわれている。

”行春を あふみ(おうみ)の人と おしみける”

人との出会い、別れ、無常は、芭蕉の句界にとってはなくてはならないものだったのだろう。なぜ彼があればほどまでに旅を重ね、そして”旅に病で 夢は枯野を かけ廻る”とまで詠んだのだろうか。決して満たされることのない、芭蕉の創作の意思だったのかもしれない。それは完成することのない彼の美学だったのだろう。

Jane Reichhold という人が著した「Basho - The Complete Haiku」という英文の本がある。その中に

”世の夏や 湖水に浮（うか）む 浪の上”

という句が紹介されている。1688年の夏、大津で作られたものだ。

”the summer world floating in the lake on the waves”

と英訳されている。井狩昨ト（いかりさくぼく）の家に招かれたときの作だと言われている。

おそらく、びわ湖に面した部屋だったのだろう。暑い夏だというのに、浪が打ち寄せ、まるでわが身が水面に浮かんでいるように涼しく思われる。今でもびわ湖の湖岸に立つとき、この湖が持つ長い歴史と、水の大きさを感じることもある。